

兪吉濬の『西遊見聞』における社会進化論的傾向

－日本の社会進化論との関連を中心として－

李 垠松*

I. 序論

近年、兪吉濬（ユ・キルジュン、1856-1914）に関する研究が様々な角度から試みられている。筆者はすでに彼の教育思想を儒教思想史的な関心から「伝統と近代を無理なく共存させた先教育後改革」論者として捉えた経緯がある。しかし、以前の研究において指摘したとおり、このような調和的な姿勢には「不徹底的な近代認識に起因しているのではないか」という疑問が、日本の文明開化論及び福沢諭吉の啓蒙教育論との関連の中から兪吉濬の教育論を考察してきた今でも、まだ残っている。拙稿（2004）では、兪吉濬の『西遊見聞』と福沢の『西洋事情』などの著書とを比較して、兪吉濬の啓蒙教育思想は基本的に天賦人権的な民権意識を唱えるものであり、それに基づいて個人的自由と国民的独立、国際的平等への道を教育を通して広げて行こうとしたのを検討した¹⁾。しかし、既存の兪吉濬の『西遊見聞』に関する研究においては、そのような傾向を言及しながらも、兪吉濬が『西遊見聞』において述べている、近代的或いは啓蒙的発想にいかなる要因が働いたのかに関して思想史的にアプローチした研究はほとんどないのである²⁾。

このような研究状況を打開するため、本研究においては、兪吉濬の『西遊見聞』における社会進化論にはいかなる思想的要因が働いたのかについて検討していきたい。

そうした研究の意図と関連して、まず、このテーマに関する韓国の先行研究における分析、及びその内容、また兪吉濬のアメリカ留学時代 E.S. モース（Edward

* 筑波大学大学院人間総合科学研究科・外国人研究者

Sylvester Morse 1838-1925) からの影響などを強調している説などを検討してみたい。

韓国における代表的な俞吉濬研究家である李光麟（イ・カンリン）と柳永益（ユ・ヨンイク）は、次のような見解を打ち出している。

李光麟は俞吉濬が日本に留学していた時期、すでに日本においては進化論の関連書籍が刊行されていた点、そして、日本留学直後「競争論」を書いた点、またアメリカ留学の時、モースから進化論を受け入れるには自然科学的知識が不足だったのではないかという点などを根拠に、俞吉濬が自然に比較的に理解しやすい社会進化論を吸収したのだと主張している³⁾。

これに柳永益は俞吉濬がモースより南北戦争後、アメリカ知性界を風靡した社会的進化論の影響を受けたと主張する。当時、アメリカではエール大学の社会学教授サムナ（William Graham Sumner）をはじめとする社会進化論者たちによる立法を通じた急進的な制度改革に反対する動きが盛んな時期だったことを強調しながら、俞吉濬は社会的進化論の影響を受けたと主張している⁴⁾。

以上の見解は、以降の研究において、社会進化論的な影響を論及する上において、基本的に共有される論議である。しかし、李の見解は、どのような内容の社会進化論を吸収したのかが曖昧としている。また柳の研究においても、アメリカの1884年前後の時代風潮がモースと俞吉濬とに直接的に影響を及ぼしたのかどうかについて不明確である。

さらに、比較的に最近の韓国の社会進化論に関する本格的な研究としてチョン・ボクヒの研究がある。

この研究の主眼は、俞吉濬の社会的競争に関する理解を基本的には自由主義的な楽観主義と進歩的思考の結合の上に成り立つものとして捉えるところにある。言い換えると、俞吉濬は、互いに競争するすべての利益は調和しあうこととなり、したがって、社会は競争を通じて進歩されるとみていたということである。彼の社会的競争の概念はダーウィンの進化論の影響により発展した可能性がある。彼自身日本・アメリカ留学時代、進化思想について学ぶ機会を実際もっていたことは否定できない。なぜなら、すでにふれたように、俞吉濬は日本に進化論を紹介したアメリカ人教授、モースの指導を受けたからである⁵⁾。

チョンによれば、社会進化論における一般的な競争は「生存競争」、「優勝劣敗」の意味における競争のみを意味するものなのだが、兪吉濬が強調する競争は「人が人に損害を与えることなく、それぞれ富貴榮達の意に従い、力を出し合う精神を興し競争し合う気風を高め、競い合う⁶⁾」のものであるという。つまり、チョンは兪吉濬における競争は啓蒙主義的自由主義の意味であり、さらに、その自由主義は自由放任的な自由主義で、それはスペンサーの影響によるものであると把握している⁷⁾。

しかし、以上のいずれの研究も兪吉濬の『西遊見聞』における社会進化論の在り方を明確にするものではない。本人はこれに関して、兪吉濬が1881年から1882年までの日本留学の際、既に社会進化論を吸収してあり、彼の『西遊見聞』における開化論から「漸進的社会進化論」の側面について検討してきた⁸⁾。

本稿ではそれを受けて、兪吉濬が如何なる方法によって、また具体的にどのような特徴の社会進化論を吸収したのかという前回の研究で残された課題を深め、兪吉濬の『西遊見聞』における社会進化論が彼の啓蒙教育思想の全体的な構想においてどのように位置づけているのかを明確にしたい。

論の進め方として、まずモースの進化論が兪吉濬に影響を与えたか否かについて明らかにするために、当時のアメリカと日本での社会進化論の傾向が兪吉濬の教育思想の枠組みにいかなる影響を与えたのか、また、モースと福沢諭吉との関係を視野に入れながら兪吉濬の社会進化論を検討していきたい。特に、兪吉濬の『西遊見聞』における「相競相励」の社会に関する内容を中心に社会進化論的な側面を分析し、それが兪吉濬の啓蒙教育思想にどのような特徴を及んだかを明確にしたい。

Ⅱ. 日本の社会進化論受容期における E.S モースと兪吉濬

進化と発展に関する見解が多様に展開されていくなかで、ダーウィンは1859年『人類の起源』を発表した。このダーウィンの進化論の意義は幅広い経験的な証拠を土台に、すべての生命体固有の進化的法則性と歴史的過程を因果的で、また、機械的なモデルを通じて説明した点にある。社会進化論はそのようなダーウィンの進化論とスペンサーの社会生物学的理論に直接・間接的な影響を受け、形成さ

れたダーウィニズムを基礎として生まれた。この社会進化論は世界各国において様々な姿で以て拡散されることとなる。生物学上におけるダーウィニズムが社会理論として生まれ変わることに至って、多大な影響力を持っていたのがイギリスのハーバート・スペンサー（H. Spencer）であった⁹⁾。彼は、文明開化を強調し、文明化、また、歴史的進歩に関する信念とは生存競争と弱肉強食の進化論を通じると、より確信に満ちた優勝劣敗の文明観を世界に拡散させたのである¹⁰⁾。

当時、スペンサーは人間の本性と人間社会を含む、すべてのものは常によりよい方向に向かって前進すると信じていた。彼は「感情的存在は低級な形態から高級な形態へと進歩して行き、そこには優越な存在が彼らの優越性のため、利益を得、劣等な存在は彼の劣等性のため、苦しむという法則がある。そのような法則が生存の維持のみならず幸福の増大のため、未だに必要である」と主張した。スペンサーのそのような思想は理性と科学の結合による完成態への進歩を目指す啓蒙思想にむすびつくのだが、しかし、この優勝劣敗の思考は自然法的な啓蒙思想とは区別されるものだった。

そのようなスペンサーの社会進化論はヨーロッパやアメリカはもちろん、日本においても大きな影響を及ぼした。しかし、科学と宗教とを和解させようとした彼の『第一原理』が刊行されてから、欧州やアメリカにおける進化論について、生物学上における進化論においてすら、強力な宗教的反発のため、自ら進化論者であると名乗り出ることが忌避された¹¹⁾。そういう状況はともかく、こういう現像からダーウィンの『人類の起源』とともにスペンサーの『第一原理』は19世紀中後半期の世界に科学と歴史、社会の進歩、進化に対する信念を拡散させていた様子はうかがうことができる。

一方、モースは日本に進化論を紹介した最初の人物であると知られている。彼は東京大学の動物学科の教授として招聘され、進化論の講義を行っているが、彼が紹介していた進化思想は主に自然科学分野に限定されていたもので、社会科学分野にまではさほど影響力を及ぼしていないという見解が一般的である¹²⁾。

むしろ、社会進化論の観点は日本の文明開化期である明治初期に入ってから、J.S ミルやスペンサーの理論が翻訳され、広く読まれていくうちに拡大されていったのである。例えば、自由民権論者たちはとくにスペンサーの「社会平権論」を

民権運動のテキストと使用しながら、個人の幸福と社会の幸福を人為的に一致させ、中央集権的傾向を強調したベンダムの功利主義とは徹底的に異なる自由放任主義的な側面を強調しようとした。すなわち、明治政府の権威的な政府機関は徐々に縮小されていかなければならないという論理は、政治と教育政策を批判する自由民権運動の代表的な論理として掲げられたのである。¹³⁾

日本における、1870年代、ダーウィンの進化論とスペンサーの社会進化論はヨーロッパのように特別な論争に巻き込まれることはなく、J.S ミルの功利主義のような啓蒙主義思想の観点から受容された。しかし、その後、西欧列強の東洋進出が本格的になるにつれ、日本社会においては、自由民権運動系列が強調する国家非干渉主義とはまるで異なる国権論が強調されることとなる。そのさい、国権論の理論的根幹として用いられてきたのが「生存競争」と「優勝劣敗」といった、社会進化論に基づく概念だった。つまり、加藤弘之や森有礼のような政府の官僚たちの間にも社会進化論は関心の標的となったわけである¹⁴⁾。なかでも、加藤弘之はスペンサーに従って社会進化論を主張した人物であるが、彼の社会進化論はスペンサーだけでなく、ダーウィン、ヘッケル (E. Haeckel)、バッケルなど、当時の西欧における進化論的、唯物主義的思想をにその根を下おろしているものだった¹⁵⁾。

ところが、兪吉濬が留学していた1880年代の初め頃の日本は社会進化論がまだ帝国主義の国家論理として定着する以前だった。1870年代後半モースは日本の明治初期知識人であるバッケル (H.T. Buckle) の『文明史』とスペンサーの『教育論』といった書物が進化論的土台の上で幅広く読まれていることに驚きを隠せなかった。モースはアメリカなら、特定の階級の人たちから嫌悪感を抱かれるだろう書物が日本では非常に関心のもとで読まれていることには十分驚くに値するというのである¹⁶⁾。とはいえ、当時のスペンサー流の社会進化論は、列強の帝国主義の国家論理としては受け入れる前だったのである。

そうした状況の中で、モースは来日した。彼は日本での講演会や魚介類の採集などについて彼の著書である『日本その日その日』に記している。また、彼は人類学者、または博物学者として新しく新鮮な出会いについても詳細な記録を残していた。彼の文明観はこの記録を通じてうかがうことができる。ところで、モー

スの『日本その日その日』では、朝鮮人に会ったことが数回記されている。そのなかで、尹致昊（ユン・チホ）と彼の父親の尹雄烈（ユン・ウンヨル）に出会った後に書いたと見られる文章から、文明と野蛮に対する彼の立場がうかがえる。

彼等が日本人を西洋文明の前衛軍とみなしているが、若し一般の朝鮮人が日本に対して持つ憎悪の念を緩和することが出来れば、それこそ朝鮮にとってはこの上なしである。日本人は東方の蛮人から得た多くの事柄を、彼等に教えることが出来る¹⁷⁾。

この文章は、西欧の文明が東方の野蛮を文明化することができるという思考を顕わにしている。これは優勝劣敗に通じる進歩－進化の思考を反映させるものといえることができるが、しかしながら、モースのそのような思考がスペンサーの社会進化論であると見なししてしまうには無理がある。なぜなら、モースは進化論者として、さしあたり彼の第一の関心は魚介類の研究であり、第二の関心は中国と日本などの遺物を理解し、収集するところにあつたからである。モースが東京大学の外国人教師として赴任する前の、1878年、公開講演に参加しているが、当時、彼の講演のテーマは昆虫の生活、ダーウィニズム、動物界の進化、動物成長の法則であつた¹⁸⁾。つまり、彼の直接の関心は生物学的進化に集中されていたのである。

一方、その時、他の講演者のなかには、太陽系の進化、宗教の進化などについて講演する者もいたという。一緒に講演に参加した福沢諭吉は自身の「国民の権利」に関する批評と治外法権を中心とする「国民の権利」について講演し、加藤弘之は日本の国学者（本居宣長と平田篤胤）について講演した¹⁹⁾。このように、この時期のモースの生物学的進化論に対し、福沢や加藤において国家次元での社会進化論の言及が行われたという事実は、1880年代の日本における社会進化論の傾向の前触れであるといえよう。

ところで、モースのダーウィニズムに基づく進化論やスペンサーの社会進化論の差異とは何か。モースはスペンサーが『第一原理』で主張した信仰と進化論の問題、そして、その間にある不可知論的な思考については特別な立場を表しては

いない。つまり、信仰の問題を学問的な進化論には結びつけようとし不在態度を示していた²⁰⁾。

一方、『学問のすゝめ』と『文明論之概略』のような代表的な啓蒙書を残した福沢諭吉は1875年『社会学研究』、1876年から77年にかけて『第一原理』を読んでいたようである²¹⁾。以降、進歩、文明に関する認識は進化論の初回以後、「生存競争」「優勝劣敗」「適子生存」という用語は文明の法則の如く認識され、以降、数多くの知識人たちの関心は文明化された西欧列強にどのような方法でもって対抗できるかという問題意識のなかで、日本の運命に直結した社会理論、社会認識論に集中されていたのである。

兪吉濬が日本を訪問した1881年の日本社会は、1870年代後半から始まった個人の自由と権利中心の民権論にもとづく啓蒙思想家たちによる国権論への関心が深められていく時期だった。福沢個人に即して言うならば、『学問のすゝめ』において強調されていた民権論的な立場から「国内の平安と国際情勢における競争(内安外競)」という論理をもって国権論を強調する、いわば思想的変化が現れようとした時期だったのである²²⁾。彼は福沢が思考の転換期に立っていたであろうその時期に慶応義塾に留学したのである。彼が福沢宅に留まりながら関心を持っていたのは、日本の啓蒙書の国漢文(当時朝鮮のハングルと漢字の混用の文章)の翻訳であった²³⁾。彼の「競争論」と「世界大勢論」などは日本留学直後の著述であるとされているが、特に「競争論」における競争とは国家はもちろん個人でも受容すべき概念である、と兪吉濬は主張している²⁴⁾。

Ⅲ. 兪吉濬のアメリカ留学と E.S. モース、そして福沢諭吉

兪吉濬がアメリカ留学をしていた時期にモースはピバディエセクス博物館の館長として活躍していた。彼は兪吉濬が1883年6月から1884年12月までの内、最初の六ヶ月の間ホームステイさせ、英語を学ぶことに援助してくれたと知られているが、しかし、彼は具体的な知識として、どのような文明を兪吉濬に伝授したかについては定かではない。ここでは、福沢諭吉という人物を媒介として、モースと日本の社会進化論的な雰囲気との繋がりを明らかにし、その上、兪吉濬がアメリカ留学の際に、吸収したと思われる社会進化論的傾向について考察していき

い。

Ⅱ章において考察したように、兪吉濬が留学していた時期の日本の社会進化論については、福沢諭吉の社会進化論的観点がうかがえる国権論からその状況に触れた。すなわち、福沢の場合、1881年刊行した『時事小言』で、大砲外交の時代においては、キリスト教の国家のみ公法と天理が通用していることを指摘し、まだ強大国とはいえない日本が進むべき方向は優勝劣敗に基づく「国内では安定、国外では競争」であると主張した²⁵⁾。しかし、そういう観点は1890年代の帝国主義の基本原則としての積極的な社会進化論の立場とは若干の距離を置くものであった。

一方、モースが見せた進化論的認識においては、文明に対する思考が絶対的にアジアにおける西欧化を支持していることを附言する必要はないが、彼の場合にも、一般的にみられる帝国主義の基本原則としての社会進化論の立場はうかがえない。

福沢とモースとの関係が篤いものだったことはモースの日記によく見られるのだが、社会進化論的な脈絡から重要なキーワードを提供してくれる資料は福沢からモースに宛られた書簡である。すなわち、福沢が兪吉濬の留学時代にモースに宛てた一通の書簡から、社会進化論と関連した3人の共通の考え方を確認することができる。

朝鮮書生兪吉濬も御手許ニ居て御世話相成候よし、此生ハ前年久しく日本ニ而拙宅ニ居り、英語ハ不通なれとも、西洋文明之事共少しくも智見を得たる者ニ御座候。今貴下之御深切を以て、次第二英文をも読慣れて、其学業之進歩するハ小生に於而も悦ふ所ニ候。日本教育之義ハ薄々御聞及もありしならん。儒教主義抔申て奇妙なる事を唱へ居り候得共、近日文部省之役人も更迭、又世間之風潮も之を許さず、遂ニは旧之英学ニ立戻る勢なり。亦是優勝劣敗之真理ニ基くもの歟。一笑²⁶⁾。

この書簡において、福沢が言及している「西洋文明之事」とは「進歩」或いは、「進化」していく国における文明化の目標のことであった。彼はこの書簡の結びで

日本の教育の原理が儒教主義から脱皮していることを挙げ、日本の教育は優勝劣敗の真理に基づいているものであるとしている。整理してみると、西洋文明の優秀点とこれからの文明の進歩の方向は西欧文明への進歩であるという優勝劣敗の真理について、兪吉濬も理解していたと考えられる。従って、1880年代中盤、日本で流行っていた優勝劣敗の社会進化論的な見解はモースはもちろん、福沢、兪吉濬、この3人が共有していた観点であるといえる。ただし、この3人が共有していた「優勝劣敗の真理」というのは西欧の文明への進歩に違いはないが、その実践の方法については相当異なっていたという点に注意する必要がある。

例えば、兪吉濬はアメリカから帰国する際、キリスト教への改宗はしないことを明らかにする手紙をモースに送っている。

私は（朝鮮で）革命が起こり、希望がないと聞いた目を忘れないと思います。（中略）私は次のような結論に至りました。活動力以外にはいかなる宗教も役には立たない、またその活動力は将来の準備における誠実なる考えをもつところにのみある、と考えています。（中略）教授に申し上げたようにキリスト教は、宗教として最も優れているので、その宗教が受け入れられるよう我が国の人々に提起し紹介しようと思っています。キリスト教国家の国民たちは自分たちの国に対して反抗せず常に平和に暮らしていると思われます。だが、私はこの世の中のいかなる宗教も信じておりません。

教授に申し上げてから、私は大体宗教に関わる問題伺ったり、疑問を抱いてみたり、また本を読んだりしています。最後に、驚いたことに創造、救援、判断、罰、洗礼、山上垂訓といったものがすでに2、3千年の前、中国やインドに存在しており、なかでも、或物は昔と変わらず神聖性と道徳を持って今日にまで維持され、続けられていることを発見しました。もちろん、そういう属性は宗教なら、どこでもあるものでありましょう。だからこそ、異教徒の代制度を採用したということは、新しい出来事ではありません。なぜならば、もしそれが紹介されたならば、それは単に昔の古い形式を繰り返すばかりではなく、古代に実施したものの再現になるからであります。

さらに、“明日を考えるな”とか“悪に対し善を以て答えよ”といったところを

読んで私は驚きました。それはキリスト教国家同士においては通用されないのに、なぜか我が国の国民の間において実践されたのであります。その理由は、教授のご存知のように、我が国の国民は商行為というものに対する理解がないために、国は非常に弱まってきたのであります²⁷⁾。

このような書簡を送ったことから、朝鮮の西欧化の一つの方法としてキリスト教の受容を、モースと話しあったことがあるのではないかと予想される。兪吉濬研究家である柳永益はこのような宗教観が進化論者であるモースの影響であろうと主張するが、しかし、モースは強力な反宗教的な進化論者ではなかった²⁸⁾。またアメリカでは反キリスト教進化論者はそれほど多くはなかったと見られる。従って、兪吉濬のキリスト教に対する立場はモースの影響というよりは、当時の朝鮮という弱小国の国民である自身が簡単に強大国の宗教であるキリスト教に改宗するわけにはいかないことを明らかにしたものだと考えられる。それに、その考え方はむしろ、「時事小言」にみえる福沢諭吉の万国公法が通用されるのはキリスト教の国同士のみであるという論調に近い。

この書簡から兪吉濬が強大国の論理に対し、抵抗感を感じながらも、同時にキリスト教を信じる国は平和であるという現実を認め、キリスト教国家の優秀性、つまり優勝劣敗の真理の一面を祖国に紹介しようとする立場をみせたということが読みとれるのである。そのとき、兪吉濬の立場は、福沢が指摘したように、西洋文明に対する素養を備えた知識人らしい面目を持っていた。言い換えれば、この書簡は兪吉濬が「徹底的な社会進化論的思考よりも愛国心があふれる進歩的な思考の持ち主」であることを確認させてくれるものなのである。

ところで、兪吉濬の思想的な枠組みは、どのような傾向を有するのであろうか。この点について次の章で社会進化論的傾向を分析しながら明らかにしたい。

Ⅳ. 兪吉濬の啓蒙教育思想に見られる社会進化論的傾向分析

西欧の東アジアに対する認識は、西欧とは異なるもう一つの文明として儒教文明を捉えるのではなく、優越な文明でいて劣等、野蛮の文明を対置しようとするものだった。つまり、主権外交と呼ばれる公法は、西欧国際法で、その理念上、

本来平等関係を規律する国際制度であったが、それが東アジアに拡散する過程においては、それは治外法権と不平等追従を強制することによって不平等の制度化を裏付ける主要な手段として作用されてしまうのである。

開化派の一員として兪吉濬もまたこの問題に多大な関心を寄せていた。つまり、弱小国ながらも、独立国としての国際的地位を確保しようとする彼の努力は「国権論」をはじめ『西遊見聞』などの論著にもよく現れている。このような関心は彼の啓蒙教育の目標が国家の富国強兵にあり、また、国民の教育に対する関心もやはり富国強兵策に結論づけられることをあらわしてくれるものである²⁹⁾。即ち、兪吉濬の教育思想は富国強兵と分離しては考えられない特徴がある。

すべての近代国家の公教育思想がそうであるように、兪吉濬においても、国家と教育とはかけ離れたものではない。彼は「国家の内部は統治し、外国とは交流する」という見解をもっており、内治における根幹となるものとして、法律と教育を挙げている。また彼は国際社会においては国際法（万国公法）が弱小国を保護するように、国内においては万民平等思想に基礎して自由と権利（通義）を主張した³⁰⁾。そのような傾向は個人と国家のバランスが自然法に基礎して、調和を遂げた「時期の力作」とであると評価される福沢の『学問のすゝめ』において強調された側面でもある³¹⁾。

一方、思想史的な側面はともかく、『西遊見聞』においては、西欧社会に対する多くの情報を紹介しており、その内容のなかの、一部は福沢の『西洋事情』から資料をもってきている。さらには『西遊見聞』の最も重要な部分としてみなされる「開化の等級」は兪吉濬の著述であるが、福沢の『文明論之概略』の文明史観との類似点を見せている³²⁾。

ただ、そのような類似点を確認するだけで、兪吉濬の社会進化論が明確にされるとはいえない。むしろ、その類似点を生じた背景に対する検討が求められる。福沢は『西洋事情』や『文明論之概略』などで多様な西欧の著作を参考にしている³³⁾。一方、兪吉濬は『西洋事情』や『文明論之概略』などからの影響を受け入れているが、その多様な著作の観点のなかで、万国公法や天賦人権などの西欧の基本的な理論や規律に関心を表しているのである。ここで、兪吉濬の開化思想の構造を非常によく見せてくれるものとしてみなされる「人世の競励」と「開化の

等級」において、社会進化論がどれ程現れているのかについて検討したい³⁴⁾。

兪吉濬の『西遊見聞』における社会進化論的な傾向は、中華主義的な朝鮮の伝統的歴史観である尚古主義的史観から人類の歴史は絶えずに発展していくという進歩史観へと進んでいくことが「開化の等級」において記されている。つまり、文明の進歩は「自然の道」とであると規定することによって、半開化国である朝鮮が文明国へと発展しなければならないという開化観を展開していたのである。この開化をきわめて「美しい域」とみるとみなす観点はバッケルの文明史観や福沢の文明論と共通している。にもかかわらず、兪吉濬の思想をスペンサーの直接的な影響としてみる観点や、あるいは福沢の観点をそのまま受け入れるものとして捉える見方には注意しなければならない。というのも、兪吉濬は5-6年間にわたる学業と経験を通じて、当時、朝鮮に適用可能な文明論を、自身が接してきた知識と経験とを取捨選択することによって明らかにしようとする立場が認められるからである。

たとえば、福沢の相対主義的観点は兪吉濬においては折衷または変通の概念によって緩和されていることがわかる。つまり、自然法のように、「自然の道」という普遍的な原理として理解しており、また「自然の道」の一つである文明の進歩は直ちに変通論を前提とした進歩史観を提示することによって、進化論的認識を打ち出している。しかし、兪吉濬は「相競相励（相競争し相励み）」することを進歩する文明国における重要な尺度として強調している³⁵⁾。そうした点を見る限り、兪吉濬における社会進化論の思想がスペンサーの影響を受けたと見るには無理があるといわざるをえない。

というのも、兪吉濬は列強の優勝劣敗に基づく国権論の立場については、徹底的に防御的な国権論の立場を固守した。つまり、「競争」に伴う、進歩と優勝劣敗の社会進化論的真理を認めながらも、列強に対する反発の論理的根拠を人権における自然法や国際関係における万国公法から提供された「相励み」の精神を通して強調しているからである。そうした見解が『西遊見聞』の編纂からうかがえるのである。即ち、兪吉濬は「邦国の権利」においては公法の精神を、また「人民の権利」においては社会の発展のための競争を重視したものの、それ以上に、規範における協力関係をも重視していたのである³⁶⁾。すなわち、彼が朝鮮の人たち

に提起しなかったのは「競争」と「相励み」とを兼ね備えた規範が確立した社会だったのである。

たとえば、『西遊見聞』の第四編「人世の競励」では人に損害を及ばないで、それぞれの富貴と栄達の意に従い、励む精神を興し、互いに競争する気風を高めて競い合うことを主張する意見が述べられている。そのような意見は福沢の『西洋事情』の外偏巻之一「世人相励み相競ふ事」からも同じくみえる。兪吉濬の思考は自由主義的競争を意味するものであると把握されているのだが³⁷⁾、そのとき、兪吉濬の自由主義的特徴は福沢が受容したスペンサーの社会進化論的な自由放任主義よりは、むしろ欧米の功利主義的自由主義に接近していると捉える方が妥当ではないかと考える。

なぜなら、この『西遊見聞』において、兪吉濬が提案しようとした基本的な人間観と国家観はスペンサーの社会進化論より、福沢の初期著作にみえるウェイルランドの観点を広く受け入れていることがわかるからである³⁸⁾。しかし、そういう特徴が兪吉濬の啓蒙教育思想の全体的な構想の基礎といえるくらい、確実に彼自身の信念になっているのかどうかについては、精密な内容の分析を行う必要があることから、今後の課題に譲ることにしたい。

したがって、兪吉濬の『西遊見聞』における社会進化論的な考え方は既存の研究で指摘された「人世の競励」より、むしろ「開化の等級」においてより明確に捉えられるのである。彼の『西遊見聞』におけるこのような社会進化論の影響が及んでいる様子は、1880年代前半の日本における社会進化論の吸収ぶりとも共通点がうかがえる。即ち、福沢諭吉にしろ、加藤弘之にしろ、当時、唯物論的社会進化論を理論的に吸収していながらも、不徹底的な社会進化論者として評価されるのである³⁹⁾。それは、まだ帝国主義列強の論理として働きはじめる社会進化論として理論が発展していく前の1880年代の当然な様子であるといえるだろう。

V. 結論

本研究は序論において明らかにしたように、第一に、日本の社会進化論的傾向は兪吉濬の思想形成にどのような影響を及ぼしたのか。第二に、兪吉濬の教育思想が「人世の競励」と「開化の等級」においてどういう社会進化論的傾向が表し

たのか、という研究課題について検討を行った。兪吉濬の教育思想は確かに、社会進化論的な影響の下にあった。しかし、彼は社会進化論の立場に立っているというより、むしろ福沢の初期著作にみえる功利主義的自由主義の影響が強いことが明らかになった。

兪吉濬は西欧啓蒙主義から帝国主義への転換期に日本へ留学し、福沢諭吉を媒介者とし、英米の功利主義的自由主義思想、スペンサーの社会進化論などの思想的洗礼を受けつつも、朝鮮のための啓蒙思想を作り上げていった。彼の啓蒙思想が必ず教育でもって先導し、法律でもって規制しなければならない社会（国家）を前提としたとき、その社会には紀綱（基本的な規範）が立てられ、はじめて開化への道は開かれるはず、と確信していた。つまり、人間の欲望と利己心は認めるが、教育と法律によりそれを統御し、統制することによって競争を通じた発展が期待できると考えていたのである。

そのように啓蒙思想の中心軸が教育にあったにもかかわらず、『西遊見聞』を「啓蒙」そのものより「富国強兵」のための啓蒙書として認識する理由は、彼の基本立場が「よい政府の設立」に焦点が合わせられていたからである。このような近代国家を目指す兪吉濬の啓蒙思想にはその根元が福沢を媒介にした西欧の自由主義から求められた⁴⁰⁾。

韓国における社会進化論は1880年代、直接間接的に兪吉濬を通じて、日本とアメリカの社会進化論が受容された。社会進化論の伝来の時期だけを見るならば、アジアの他の国よりさほど遅れているとはいえない。しかしながら、朝鮮における社会進化論が強力な形として台頭してきたのは生存競争が法則として支配する現実を目の当たりにした以後のことであった。それはまず実力を養成しなければならないという1900年代の実力養成論の形でもってあらわれた。

このように、兪吉濬が、いち早く社会進化論の影響を受けながらも、「優勝劣敗」などの進化論的脈絡よりは既存の自然法に基づいた自由主義的立場を尊重しようとしたのは、弱小国であった朝鮮の知識人であった彼の不可避な選択だったのであろう。

注

- 1) 拙稿(2004)「兪吉濬の『西遊見聞』における教育論－福沢諭吉との思想的関連を中心として」、『日本の教育史学』教育史学会紀要、第47集
- 2) 兪吉濬の『西遊見聞』に関する研究は、福沢諭吉の『西洋事情』との表面的な比較あるいは『西遊見聞』の解釈に止まっている研究が多い。韓国と日本における兪吉濬に関する先行研究の動向と概要は拙稿(2001)「兪吉濬の日本留学に関する一考察－朝鮮開化派と福沢諭吉の関係を中心として－」(『筑波大学教育学研究集録』25)Ⅰ章と注(5)、(10)参照を願いたい。兪吉濬の『西遊見聞』に関する先行研究は以下の通りである。
金泰俊「『西遊見聞』と『西洋事情』－比較文化的研究のための問題提起」(『読書新聞』、1974)、全鳳徳「西遊見聞と兪吉濬の法律思想」(『学術院論文集』15、1976、『韓国近代法思想史』博英社、1981)、李光麟「兪吉濬の開化思想－西遊見聞を中心に」(『歴史学報』75、76合集、1977)、魯在化「福沢諭吉と兪吉濬の開化教育に関する比較考察」(『一橋研究』12、1988)、柳永益「西遊見聞論」(『韓国市市民講座』7、一潮閣、1990)、任展慧『日本における朝鮮人の文学の歴史－1945年まで』(法政大学出版局、1994)、金泰俊「外国への憧憬と祖国への回帰－兪吉濬の『西遊見聞』、福沢諭吉の『西洋事情』との関連を中心」(『比較文学研究』(東京女子大学)、1996)。
- 3) 李光麟(1993)『韓国開化思想研究』、ソウル：一潮閣、pp.257-259。
- 4) 柳永益(1990)『甲午更張研究』、ソウル：一潮閣、pp.135-136。
- 5) チョン・ボクヒ(1996)『社会進化論と国家思想－旧韓末を中心として』、ソウル：ハンルル、pp.111-112。
- 6) 兪吉濬(1971)『兪吉濬全集』Ⅰ、ソウル：一潮閣、p.145(以下『西遊見聞』と表記する。)
- 7) チョン・ボクヒ(1996) pp.112-113。
- 8) 拙稿(2004) pp.132-135。
- 9) チョン・ボクヒ(1996)、pp.19-22。
- 10) 山下重一(1983)『スペンサーと日本近代』、東京：お茶の水書房、pp.62-69。
- 11) E.S. モーズ(石川勸一訳、1992)『日本その日その日』1～3、東京：平凡社、p.145。
- 12) 彭澤周(1976)『中国の近代化と明治維新』、京都：同朋舎、p.160。
- 13) 社会進化論に関する一般的なものめは次の論文と本を参考にした。堀松武一(1978)「わが国における社会進化論および社会有機体説の発展－加藤弘之を中心として－」、『東京学芸大学紀要』第1部門教育科学第29集、p.16、横山寧夫(1967)「加藤弘之と社会的ダーウィニズム」、『社会学論集』第37集、p.4-5、山下重一(1983)『スペンサーと日本近代』、東京：お茶の水書房、pp.62-69。
- 14) 山下重一(1983) pp.62-69。
- 15) 堀松武一(1978) p.16。

- 16) E.S. モーズ (1992) 3, p.145。
- 17) E.S. モーズ (1992) 3, p.144。
- 18) E.S. モーズ (1992) 3, pp.228-229。
- 19) E.S. モーズ (1992) 3, pp.228-229。
- 20) モースは家庭的に保守的でまた頑固なプロテスタントの親父の元で育った。当時流行っていたホソンやエマソンなどの自由主義的書物を読んだこともなかった。また彼の動物学の師匠であったアガシは牧師の息子で、キルビン主義的人物として進化論には反対したという。そのような進化論を接するには保守的で、頑固な環境に身を置いていたモースが進化論者として転換を決心したのは、魚介類の種に関する研究を重ねながら、ダーウィンの理論を受け入れるようになったからであるといわれている。彼は進化論者として1873年自ら進化論者であると名乗り、イギリスへ渡り、ダーウィンより直接指導を受けた。生物学者でありながら、同時に博物学者、また考古学者でもあったモースは東京大学動物学科の教授として在職していた時期に進化論の講演、および学会の創立、などの活動を通じて、日本の知識人たちに大きな刺激を与えた。藤川玄人 (1992) pp.247-249。
- 21) 安西敏三 (1995)『福沢諭吉と西欧思想－自然法・功利主義・進化論』、名古屋：名古屋大学出版会、p.8。
- 22) この他、「他人愚を働けば我も亦愚を以て之に応ぜざるを得ず。他人暴れば我亦暴なり。他人権謀術数を用れば我亦これを用ゆ。愚なり暴なり又権謀術数なり、力を尽くして之を行ひ、復た正論を顧るに遑あらず。蓋し、(中略) 人為の国権論は権道なりとは是の謂にして、我輩は権道に従ふ者なり」という文章も福沢の国権論者としての転回を表している文章としてよく引用される。福沢諭吉 (1881)「時事小言」、『福沢諭吉全集』(1958、東京：岩波文庫) 第五卷、pp.108-109。
- 23)『福沢諭吉伝』第三卷、 p.298。
- 24)「概して人生の万事が競争に依支しないことはないから大きくはすなわち、天下国家のものから、小さくはすなわち、一身一家のものに至るまですべて競争から因して能に進歩を始めることであるから、もし人生が進歩することがないならどうしてその知徳と幸福を崇進することを得られようか。国家が競争することがないならどうしてその光位と富強を増進することを得られようか」『愈吉濬全書』(1971、ソウル：一潮閣) IV、政治経済篇、「競争論」、pp.17-18。この「競争論」から社会進化論的な考え方が見えるという意見は既に検討したのである。(拙稿、2004、p.133)。
- 25) 国際世界で万国公法が通用されるのは「唯耶蘇宗派の諸国」だけだという福沢の見解はよく引用される文章である。『福沢諭吉全集』(1958、東京：岩波文庫) 第五卷、p.184。
- 26)『福沢諭吉書簡集』 第四卷、岩波書店、2001、171頁。なお、この書簡は現在アメリカのセイラム市にあるピリプス図書館に所蔵されていることを確認した (Hukuzawa,

- Yukichi, May 17, 1884, PROPERTY OF PHILLIPS LIBRARY)。
- 27) Yu, *kilchun* letter, Box # 15, Foler # 10, PROPERTY OF PHILLIPS LIBRARY。
- 28) 注11)で紹介されている堀松氏の論文の15ページに引用された渡辺正雄(『日本人と近代科学』)の意見では「厳格な宗教的雰囲気は宗教への強い反感をモースに植え付けた結果になっていたため、彼の進化論には反キリスト教の傾向が著しい」というが、藤川玄人は『日本その日その日』の解説で異なる意見を表している。「モースは家庭的に保守的でまた頑固なプロテスタントの親父の元で育った。当時流行っていたホソンやエマソンなどの自由主義的書物を読んだこともなかった。また彼の動物学の師匠であったアガシは牧師の息子で、キャルビン主義的人物として進化論には反対したという。そのような進化論を接するには保守的で、頑固な環境に身を置いていたモースが進化論者として転換を決心したのは、魚介類の種に関する研究を重ねながら、ダーウィンの理論を受け入れるようになったからであるといわれている」と説明したのである。藤川玄人(1992)「解説」『日本その日その日』1、東京：平凡社、pp.248-249。
- 29) 拙稿(1997)「初期開化派の近代教育改革論研究」、梨花女子大学校博士学位論文、拙稿(2001)「兪吉潐の日本留学に関する一考察－朝鮮開化派と福沢諭吉の関係を中心として－」、『教育学研究集録』(筑波大学)25参考。
- 30) 『西遊見聞』、pp.98-99。
- 31) 北田耕也(1999)『明治社会教育思想史研究』、東京：学文社、第4章福沢諭吉論を参考。福沢の「啓蒙思想の教化の論理への収斂過程」として福沢の啓蒙思想の民権論的な可能性が自然法思想の放棄と「権道」の選択から啓蒙の変容が始まったと評価している。氏はその以前の福沢思想は「一身独立して一国独立す」というテーゼに啓蒙的自然法思想が前提され、丸山真男の指摘とおり「個人的自由と国民的独立、国民的独立と国際的平等は全く同じ原理で貫かれ、見事なバランスを保っている」と評価している。
- 32) 拙稿、2004。
- 33) たとえば、福沢は『西洋事情』の執筆に取り組みにつれ、フランシス・ウェイランド(F. Wayland)の『政治科学の基礎』の自由主義観点に基礎を置き、イギリスのチェンバース版『経済読本』とブラクストン(William Blacstone、1723-1780)の『英語釈義』の内容を翻訳して紹介している。また彼が『学問のすゝめ』を著述したとき、参照した著書にはフランシス・ウェイランド(F. Wayland)の『道徳科学の基礎』であった。また『文明論之概略』の著述においては、フランソワズ・ギゾー(F.P.G. Guizot、1787-1874)の『ヨーロッパ文明史』、バックル(Henry T. Buckle、1821-1862)の『イギリス文明史』、ミルー(J.S. Mill、1806-1876)の『自由論』、『代意政治論』、『経済学原理』、スペンサーの『社会学研究』などを参照した。安西敏三(1995) p.7, p.379。
- 34) 兪吉潐の『西遊見聞』の「人民の権利」と「人民の教育」は『西洋事情』において紹介されたウェイランドの『政治科学の基礎』および『道徳科学の基礎』であり、「開化の

等級」では『文明論之概略』において紹介された内容の影響がうかがえる。拙稿、2004。

35) 『西遊見聞』、pp.131-133。

36) 『西遊見聞』、p.133。

37) チョン・ボクヒ (1996) p.112、引用文は『西遊見聞』 p.145。

38) 福沢を媒介にしたウェイランドの思想と兪吉濬の『西遊見聞』に対する分析は次回の研究に譲ることにしたいが、人間の欲望を社会的存在としての、人間の自然な姿として理解しようとする観点が提供される人民の権利と教育に関する内容がウェイランドの著述から始まっていることは注目に値する。

39) 注11) 参考。

40) 本稿において提起された、兪吉濬が自由主義的な啓蒙思想に基づいた進歩的啓蒙運動家であるという結論に対して異なる意見も多数予想される。例えば、柳永益は「『西遊見聞』における自由主義的な側面は福沢の『西洋事情』から無批判的に受け取った内容で、また兪吉濬が十分消化・整理しえなかった側面である」(『韓国近現代史論』一潮閣、1992、p.137)と指摘しながら、兪吉濬を保守的漸進改革論者として見なしている。しかし、兪吉濬が自由主義的な啓蒙思想的な傾向を持っていたのは確かである。但し、複雑さを保つ兪吉濬の啓蒙教育思想を正確に照明するためには、兪吉濬の思想全般に影響を及ぼしている諸思想、とりわけ儒教的伝統および西欧の思想との関連性を把握し、それぞれの諸思想を有機的に関連づけようとする兪吉濬の思想の特徴を把握しなければならない。また、今回の研究を土台にし、兪吉濬の教育思想における近代的或いは啓蒙的発想にいかなる要因が働いたのかに対するさらなる分析が加えられなければならない。それは今後の課題であるといえる。

**The Theory of Social Evolution
in Yu Kil-chun's *Sōyukyōnmun*:
Impact of Japanese Theory of Social Evolution**

Eunsong LEE

This study argues that the Japanese theory of social evolution in early 1880s affected Yu Kil-chun's idea in his work *Sōyukyōnmun*. Previous works state that Yu Kil-chun's idea of social evolution was affected by E.S. Morse when Yu studied in America. I dispute this previous discourse by following three arguments.

First, Morse's theory of evolution focused on biological aspects rather than social factors. Second, Morse maintained a close relationship with Fukuzawa Yukichi not only when he stayed in Japan as a foreign professor of the University of Tokyo but also after he returned to America. This close relationship was strengthened by their mutual belief that Japan must civilize herself in the Western way. This belief revealed the nature of Japanese social evolution theory of 1880s, which did not have strong theoretical basis. Third, Yu Kil-chun's work *Sōyukyōnmun* emphasized the significance of social discipline, which respected both competition and morality. Yu argued the concept of competition in the perspective of the theory of social evolution and Yu's idea of the theory of social evolution was affected by Fukuzawa Yukichi's theory of social evolution rather than Morse's.